留学生との交流が日本人学生に与える影響（２）
－国際交流グループに所属する日本人学生の変容に関する事例分析－

藤井　桂子

【キーワード】PAC分析、国際交流サークル、留学生との交流、変容、事例分析

１．はじめに

大学における留学生と日本人学生との交流の促進は、留学生支援の側面からだけでなく、日本人学生の異文化体験の学習機会としての側面からも重視されるようになり研究のテーマともなってきた。チューター活動を行う日本人学生を対象とした研究（田中1995a、田中1996、瀬口・田中1999、山崎2002他）では、留学生との交流に一定の教育的効果が見られることが明らかにされているが、個々の学生に対する影響を探る質的な研究はまだあまりなされていない。また、様々な国からの留学生と日常的に交流している国際交流グループの日本人学生を対象とした質的な研究（花見（2006））は数が限られており、交流活動の中で個々の学生が何をどんな過程で学び得ているのかの詳細は明らかにされているとはいえない。

本研究は、国際交流グループに所属する日本人学生2名を対象に、留学生との交流の影響を分析した藤井（2010）に続くものである。藤井（2010）では、活動初期の２名の学生（グループに所属して３ヶ月の学生と６ヶ月の学生）に対しPAC分析を用いた調査を行い、個々に特徴的な態度構造と２名に共通する態度構造が見られることを示した。本研究は、前回の調査からほぼ1年半後に、同じ２名の学生に対して同じ手順で調査を行い、その結果と前回の結果との比較から、留学生との交流に対する日本人学生の態度構造の変容を探ろうとするものである。

PAC分析（Personal Attitude Construct）は、内藤哲雄（2002）が開発した技法で、量的研究と質的研究の手法を合わせ持ち、個の内面に深く迫る分析法としての特徴を持つ。また、設問等であらかじめ枠組みが用意された調査と異なり、個人の自由な発想を基に、項目が抽出され枠組みが作られ

る。したがって、時間を経た後の、個人の枠組みがどう変わるかも含めて、個々の変化を、より鮮明に捉えることができることになる。２名の事例を詳細に分析することで、今後、事例を増やし類型を導き出していくことにも繋げていけるものと考える。

２．調査の概要

２．１　調査対象者･調査時期

大学の国際交流グループに所属する日本人学生２名JA、JBに対して調査を行なった。前回（第１回）の調査を行った時期は、JAはグループに所属してから約３ヶ月の時点、JBは約６ヶ月の時点であった。この２名を調査・分析の対象としたのは、両者がグループに所属して活動初期の時期にあったこと、海外在住経験や留学生との接触が以前にはなく留学生との交流の影響が見やすいと考えたことが主な理由であった。JA、JBに対する今回（第２回）の調査はそれぞれ前回（第１回）の調査のほぼ１年半後に行った。JAは活動を開始してから約１年８ヶ月の時点、JBは約２年の時点である。

前回調査から今回調査までの１年半の間、JAは交流グループの中心メンバーのひとりとして交流行事の企画実施などを行うとともに、個々の留学生とも日常的な交流の機会を持つが、調査の時点では海外に滞在する経験は持たない。一方JBは交流グループの中で、比較的自由な立場で活動し、グループでの活動やチューター活動で接触する個々の留学生と日常的に交流を行っており、この間、初めて海外へも出かけ、それ以降、留学生の母国を訪ねたり、留学生と共に海外を旅したりする経験を積んでいる（注１）。

２．２　調査手順

前回の調査と同様に、調査への協力の了解を得た上で、内藤（2002）のPAC分析の手順に従って調査を行った（注２）。連想刺激は、前回の調査と同じ以下の文面を用いた。

『「留学生との交流」「留学生へのサポート」と聞いたとき、あなたはどんなイメージが浮かびますか。またこれらは、あなたの考え方（現在および将来）に、どのような影響を与えているあるいは与えると思いますか。

思い浮かんできた言葉やイメージを思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。』

３．結果

ここでは、JA、JBのそれぞれについて、今回（第２回）の調査でのクラスター分析の結果（デンドログラム）と、本人のクラスター解釈を踏まえた調査者による総合的解釈を示したのち、前回（第１回）の調査結果の概略を示し、両者の比較を行う。なお、クラスター分析の結果（デンドログラム）は、被調査者ごとに今回の調査と前回の調査の両方を合わせて図１、図２、および図３、図４に示した。前回の調査結果の詳細は藤井（2009）を参照していただきたい。

３．１　JAについての分析結果

3.1.1　今回の調査におけるJAについての総合的解釈

図１は今回（第２回）の調査から得られたJAのデンドログラムで、図２は前回（第１回）の調査のJAのテンドログラムである。テンドログラム左端の数字は各項目の重要順位を示している。各項目の右端の符号（＋、－、０）は、単独のイメージを示す。図におけるＣ１、Ｃ２、Ｃ３・・は、各クラスターの範囲を示す。

図１にもとづき、各クラスターにそって、JAについての総合的解釈を以下に記す。＜　　＞内は各クラスターにつけた名前である。

クラスター１　＜心の広がり＞:「オープンマインド」〜「日本のありがたさ」

ここでは、留学生との交流を通じてJAにもたらされた「心の広がり、視野の広がり、理解の広がり」が捉えられている。JAは留学生との交流の中で文化の違い、言葉の違い、習慣の違いと様々な違いを知る。最初は抵抗感や違和感を感じていたが、「オープンマインド」を心がけるうちに、どんなことも吸収していけるようになり、「視野が広がり」「多様性への理解が深まり」「差別をしなくなり」いつの間にか「違うことが当たり前」と思えるようになる。また、ひとつの考え方だけではなく、「物事を違っ

た側面から考えることができる」ようになり、「異文化理解」も深まっていく。留学生の友人にも日本人の友人にも同じように接することができ、国が違うからということを考えなくなる。ここには、留学生との交流がJAにとっては、特別なものではなくなっていく過程が示されていると言えよう。

一方、留学生と接する前はJAとって当たり前のものであった「日本文化」を「改めて見直す機会」ができ、「日本を客観的に見ることができる」ようになったとしている。日本のよいところ、よくないところに気づかされ、その中で大事にしたい文化や「日本のありがたさ」を改めて考えるようになっている。

このクラスターの各項目のイメージはすべてプラスで、クラスター全体も「明るく、広く、なにも隔たりがないイメージ」で、JAは自分の内面世界が広がり豊かになったことを実感している。また、自分と同じような体験を周りの学生や小さな子供にもしてほしいとも願っている。

クラスター２ ＜世界への関心の広がりと交流の楽しさ＞：
「他国への関心」～「楽しい」

このクラスターでは　JAの「世界への関心の広がりと交流の楽しさ」が示されている。JAは留学生との交流で「他国への関心」が自然と高まり、その国について調べるなどして理解を深めている。以前、町の中で外国人を見たとき感じた「違和感」や特別な感情が全くなくなり、また、これまで日本の生活の中では気にすることがなかった「宗教」に対しても信仰心を持つ留学生との交流の中で「理解が深まり」抵抗感がなくなったとしている。JAは、留学生との関わりだからこその「楽しさ」も感じている。留学生の方からJAが知らない日本文化についての話を聞くことがあったり、自分の国の料理を作り合ったり、日々「新たな発見」があるという。また、いっしょに、髪を切りに行ったり、買い物をしたり、ご飯を食べたり、日本人同士と変わらない付き合いをする中で、出会いへの感謝を聞き、そのことに対し喜びを感じている。留学生の帰国後も連絡を取り合い、その国を訪ねたり、日本へ戻って来たときにいっしょに時間を過ごしたりすることにも楽しみを見出している。

こうした留学生との交流を通じて、今起きていることだけではなく将来

へのこと、日本国内のことだけでなく世界へと関心がいくようになったとしており、視野の広がりが窺える。項目のイメージはすべてプラスである。

クラスター３ ＜行動の変化と課題＞：

「自分の意見を言う機会が増える」〜「日本語の難しさ」

留学生との交流における「困難とその克服による成果」がこのクラスターに現れている。留学生との交流では、日本人同士との交流と違って、どうしてそう考えるかと、意見を聞かれることが多い。また、留学生は日本人のように、実際どう思っているのかについて、わざわざ表情や心の中まで読もうとはしないので、言っていることと思っていることをきちんと一致させて、しっかりと論理的に話さなければ伝わらない。そこでJAは、苦労しながら留学生に伝わるような話し方を身につけたという。交流初期には、「積極性」は全くなく、英語も全く話せなかったため、留学生の輪の中に入るのも怖く困難に感じていたが、英語の勉強への意欲が湧き、徐々に「積極性」を身に付けていく。今ではゼミで、自分から手をあげて「意見が言え」、苦手だった人前での発表が緊張せずに言えるようにまでなっている。

クラスター１や２に現れた変化は自然に生じたもので、ふわふわしたイメージであるのに対して、クラスター３は固い石のようなイメージであると言う。固い石のイメージは「自分で意見を言う」のは容易ではなく苦労や訓練が必要だったためとしているが、行動した結果得られた確固たる成果のイメージを同時に示すものになっているように見える。「言葉の壁」や、「日本語を説明する難しさ」が困難なこととして、マイナスとゼロのイメージになって、このクラスターに置かれている。本人が、新たに別の言語も勉強するという行動につながるといっているように、これらは今後克服すべき課題としてここに位置づけられていると解釈できるだろう。他の項目はプラスイメージである。

図１　JA 第２回調査のテンドログラム

```
        0                                                   11.21
        |----+----+----+----+----+----+----+----+----+----+----+  距離        ____________________
 1      |___.  オープンマインド  +                                          《C1:心の広がり》
 2      |___|     視野の広がり  +
 4      |___|    多様性への理解が深まる  +
12      |___|_____.      差別しなくなる  +
 3  C1  |___.      |  物事を違った側面から考えることができる  +
 5      |___|      |     異文化理解  +
 6      |___|_____|____________________. 違うことが当たり前になる +
 7      |___.                          |     日本文化を改めて見直す機会  +
11      |___|                          | 日本を客観的に見ることができる  +
15____  |___|___________________________|___________. 日本のありがたさ  +  ____________________
 8      |___.                                          |    他国への関心 +   《C2:世界への関心の広がりと交流の楽しさ》
13      |___|                                          | 新たな発見  +
16      |___|                                          |    外国の人への違和感なくなる  +
17  C2  |___|______.                                   | 将来世界中に友達がいることになる  +
14      |__________|_____________________.              |     宗教の理解度  +
18      |________.                     |               |  感謝されることへの喜び  +
20____  |________|_____________________|________|_____.  楽しい  +  ____________________
 9      |___.                                            |    自分の意見を言う機会が増える  +
10  C3  |___|_____________________________.              |  積極性  +
19      |___.                             |              | 言葉の壁  ー    《C3:行動の変化と課題》
21      |___|_____________________________|______________|  日本語の難しさ  0  ______________

        +----+----+----+----+----+----+----+----+----+----+
```

左橋の数字は重要順位。c1、c2、c3は各クラスターの範囲を示す。各項目の後ろの符号は単独でのイメージ

図２　JA 第１回調査のテンドログラム

```
        0                                                   9.40
        |----+----+----+----+----+----+----+----+----+----+----+   距離        ______________
 1      |____. 視野の広がり  +                                          《C1:オープンな心》
 2      |____|       いろいろな人を受けいれられようになる +
 4  C1  |____|  深いつながり  +
 7      |____|___.       広い心を持てる  +
 5      |____.   |            心がオープンになる +
 9_____ |____|___|_____________________________. 人の良い所を見けられるようになる  +  ______________
10      |____.                                |  積極的になる  +              《C2:成長するための土台》
13  C2  |____|_____________________________.   | 好奇心    +
12      |__________.                          |   |    年齢の差を感じない  +
15_____ |__________|_____________________|___|_______________. 様々な国の人の大まかな習性が分る+___
 3      |____.                                              |  日本のよさの再認識  +
11      |____|______________.                               | 文化の違い  ー
 6  C3  |____.              |                               |    異文化理解  +
 8      |____|              |                               | 習慣の違い  ー  《C３:日本と世界の違い》
14      |____|______________|_____________________________| 言葉の壁 ー     ____________________

        +----+----+----+----+----+----+----+----+----+----+
```

左橋の数字は重要順位。c1、c2、c3は各クラスターの範囲を示す。各項目の後ろの符号は単独でのイメージ

全体

全項目21のうちクラスター３の２項目をのぞく19がプラスイメージである。３つのクラスターでは、JAの**「人間としての内面的な広がり」、「世界に対しての関心と理解の広がり」、「行動の広がりと課題」**が捉えられており、留学生との関わりを通じてのJAの成長のプロセスと成果を示すものとなっていると言えよう。また留学生との交流や交流から得られたものは、大学を卒業した時に終わるものではなく将来にも続くもので、この先、日本国内だけでなく広い世界へとつながるものとしてイメージされている。さらに、またJAが描く自分の将来や仕事にも結びつくと考えている。全体を通して留学生との交流はJAにとって、**「自身を成長させ将来へつながるもの」**として認識されていると言える。

3.1.2 JAの前回の調査結果と今回の調査結果の比較

3.1.2.1 JAの前回の調査結果の概要

図２に示すように、前回交流初期の調査におけるテンドログラムは以下の３つのクラスターから構成されていた。15項目のうち、プラスイメージが12、マイナスイメージが３で、マイナスイメージはクラスター３に集中している。

クラスター１ ＜オープンな心＞：

「視野の広がり」～「人の良い所をみつけられるようになる」

年齢や立場を気にする日本人同士のつきあいとは異なり、留学生は、始めから壁を作らず個人としてJAに素直に接し、深い質問を投げかけてくる。JA自身もオープンな心で人と接し、人といい関係が築けるように変わり、**「心の広がりを実感」**する。そして、このことが留学生との交流を続ける動機付けとなっており、このクラスターは動機付けを示すものと解釈できた。

クラスター２ ＜成長するための土台＞：

「積極的なる」～「様々な国の人の大まかな習性がわかる」

JAは留学生と交流していく中で、異文化への興味や好奇心が膨らみ、勉

強したいという気持ちや、成長していこうという前向きな気持ちを持つようになった。学生である今だからこそ、いろいろな人と接して、いいことも悪いことも何でも経験し吸収していきたいという**「意欲と期待」**が示されていた。クラスター２も動機付けとなるクラスターと見ることができた。

クラスター３　＜日本と世界の違い＞：

「日本のよさの再認識」～「言葉の壁」

留学生との交流で感じる、文化の違い・習慣の違い・宗教の違い・言葉の違いに対し、興味を覚えると同時に、乗り越えていかなければいけない、避けて通れない課題としてマイナスのイメージを伴って受け止めていることが示されていた。**「違いへの興味と恐れ」**を捉えているこのクラスターは交流における課題を示すクラスターと解釈できた。

3.1.2.2　JAの前回調査との比較

刺激文からJAが連想する項目は前回と今回と重複するものが半数以上ある。重要順位上位の項目も重なるものが多い。クラスターの構造も似ており、両方とも　大まかに見ると、**心の広がり、関心や意欲、困難さ** をテーマに各クラスターが構成されている。

前回と今回の調査で出て来た主なトピックについてのJAの調査時点での認識や態度を本人のクラスター解釈をもとに以下のようにまとめた。また交流グループに入り活動する以前について言及があるときは、それを記した。

表1

JA	活動前	前回調査時期　活動開始から3ヶ月	今回調査時期　活動開始から1年８ヶ月
国の違い			国の違いを意識しなくなった
宗教の違い	ほとんど関心がなかった	宗教に基づく習慣などに触れ、驚いた／もっと理解したい	宗教が違っても人として根底は同じ抵抗感がなくなった／日本社会にもっと理解が広がってほしい

日本と世界 違い全般	町で会う外国人に違和感や抵抗感があった	違いは興味を感じる一方でマイナスのイメージも大きい／もっと勉強して違いを乗り越えていかなければいけない	違いに違和感や抵抗感がなくなった 違いがあって当たり前と感じる／小さいときから国際交流していれば、差別やいじめがなくなるだろう 外国人を差別する人を見ると悲しく思う 東アジアの歴史をもっと勉強したい
留学生との 交流	特別なこと	始めは留学生の輪に入っていくのが怖かったがだんだん慣れた／行動してみればやれること 日本人の場合と違い、年齢などを気にしないで関係が作れる／相手に遠慮がないから、こちらも心を開いて話せる	いつでも誰にでも心を開いていろんなことを吸収できるようになった 新しい発見が毎日あって楽しい 感謝されるとうれしい 友達として日本人と同じ 特別ではなく普通のこと
帰国後の 留学生			連絡をとりあって、相手の国を訪ねたり、また日本に来たときにいっしょに遊ぶ これからもずっと続く関係
意見を表明すること	周りの雰囲気を壊さないように合わせようとしていた 人前で話すのが苦手だった	留学生に理由や意見を度々求められ、段々意見が言えるようになった	留学生は日本人のように心の中を察してくれないから、思っていることと話すことを一致させて言うように努力し、段々できるようになった／物事に対し、自分の意見を持つようになり、自分からも相手に意見を求めるようになった／ ゼミで自ら手をあげて意見が言えるようになった。人前で話すことが平気になった
日本について	日本の生活は当たり前のものとして認識	日本のありがたさがわかる	日本について考える機会が増えた／日本のいいところ、悪いところが見えてくる／大事にしたい日本の文化も見えてくる

将来の仕事との関わり		留学生との交流で得たことは、どこで働こうと役立つ	留学生との交流で得たことは、海外にこれから進出していく新しい企業で働きたいという自分の希望を実現する上で役に立つ
その他		誰とでも心を開いて話せるようになってきた	海外でも現地の人とすぐ仲良くなれた 積極性が徐々に身に付いた

前回と今回の調査結果の比較からあきらかになったJAの主な変化は以下のとおりである。

① 対人関係形成上の成長。留学生との交流をきっかけに、心を開いて人と接することができるようになり、誰とでも話せるようになる（前回、今回）。海外でも現地の人とすぐ仲良くなれた（今回）。

② 「違うことが当たり前になる」という項目に代表されているように「違いに対する認識や態度」に変化が生じている。前回は「違い」は、驚きや困難としてマイナスのイメージを持ち、避ける事ができない、乗り越えていくべき課題として認識され、クラスター３を形成していた。しかし、今回の調査では、違いへの抵抗感、違和感が解消され、「違うことが普通」という認識に変わっている。また、この変化に伴い、留学生との交流が「楽しいもの」として前回より強く認識されている。

③ 留学生との交流を通じて「自分の意見を言えるようになった」という具体的な成果が見られた。前回もこうした変化は芽生えていたが、今回の調査では、相手に聞かれて意見を言うだけでなく、相手に意見を求める、ゼミで自ら手をあげて意見を述べるなど、大幅な進歩が見られる。訓練や苦労の末獲得した成果でもあることが、「固い石」のイメージから窺い知れる。

④ 日本について考える機会が増え、日本に対する認識が深まり整理されてきている。

⑤ 自分が得た知識や認識が、他の日本人学生や日本社会にも広がってほしいと願う社会的な観点に立つ発言がいくつか見られるようになり、視野の広がりが感じられる。

⑥ 交流で得られたものと関連づけて、将来の仕事を具体的に描くようになった。

以下は前回、今回とも共通して見られたものである。
① 異なる世界のことをもっと知りたいという意欲。
② これからもオープンマインドでどんどん新しい人と知り合い、いろいろなことを吸収したいという気持ち。

２回の調査を通して見えてくるのは、JAの学びと成長の過程である。前回の調査では、JAには、**「心の広がりへの実感」、「交流への意欲と期待」、「違いへの関心と恐れ」**を示す３つのクラスターが見られたが、今回の調査では、「心の広がり」を実感するだけなく、「視野の広がり」や「理解の広がり」が確実に自分のものとなって実感され、それによって**「違うことが当たり前になる」**という大きな変化が見られる。前回「交流への意欲と期待」や「違いへの関心と恐れ」としてまだ抽象的な段階にあったものが、「他国に対するポジティブな関心の高まりや交流の楽しさ」として具体的に実感されるものへ変わり、また、これまで「できなかったこと（自分の意見を言うこと）への挑戦」が「成果」となって実現したことがわかる。

JAにとって、留学生との交流は、JAの成長を促す上で大きく作用したことが窺える。JA自身も留学生との関わりが自分を変え、成長させていくと感じている。

３．２ JBについての分析結果

３．２．１ 今回の調査におけるJBについての総合的解釈

図３は今回（第２回）の調査から得られたJBのテンドログラムで、図４は前回（第１回）調査のJBのテンドログラムである。テンドログラム左端の数字は各項目の重要順位を示している。各項目の右端の符号（＋、－、０）は、単独のイメージを示す。図におけるＣ１、Ｃ２、Ｃ３・・は、各クラスターの範囲を示す。

図３にもとづき、各クラスターにそって、JBについての総合的解釈を以

下に記す。＜　　＞内は各クラスターにつけた名前である。

クラスター１　＜国際交流の現実＞：

「自分の意志をはっきり言う」～「アメリカ軍の基地」

国際交流について、これまでのJBの体験を踏まえて、現在の関心事であり重視している事柄がここに示されている。各項目のイメージは、11項目中プラスが６、ゼロが４、マイナスが１である。肯定的に捉えていることもあれば、全面的に肯定できないもの、あるいは否定的に見ている事柄が含まれており、JBがその全体をひっくるめて交流の現実として捉えていると言える。

プラスの項目となっている「会話能力」「パーティ」「facebook」「英語」は、国際交流に欠かせない重要アイテムとして，また、「世界に人脈を作る」「グローバル」は、帰国後の留学生と将来に渡り交流が継続されるイメージとしてこのクラスターに置かれているように見える。一方「自分の意志をはっきり言う」「積極性」は、全体の中でも重要順位が２番目、３番目の項目で、JBも国際交流におけるもっとも大切なこととして自覚しており、国際交流における「心得的なもの」としてここにあると思われるが、イメージはゼロである。JBは、日本の習慣に合う控え目な意見表明の仕方や、状況を察した表現の仕方にも価値を感じ、発言にはコントロールが必要だと考えている。このようなJBの理解が、ゼロのイメージに反映されていることが窺える。

マイナスのイメージを持つのは「帰国子女」で、「英語ができる人は価値がある」というような図式や帰国子女が受験で優遇されることにJBは疑問を感じている。JBの英語会話力は日本人学生としてかなり高水準にあると思われるが、「英語」についても、JBは複雑な感情を持つ。国際交流といえば「英語」というステレオタイプが、中国人や韓国人が大勢いる実際の交流では必ずしもあてはまらないことを既に理解しているからである。しかし、その有効性も否定できないことから、英語のイメージは上述のようにプラスとなっている。「アメリカ文化」に対する感情も単純ではない。アメリカに対する憧れを認めつつ、他のクラスターにある「白人至上主義」とも結びつくことから、これでいいのかという気持ちがずっとあると述べている。この項目のイメージはゼロである。

図３　JB 第２回調査のテンドログラム

```
       0                                                  8.51
       |----+----+----+----+----+----+----+----+----+----+  距離  ____________________________
 2     |_____.   自分の意思をはっきり言う 0                                  《C1:国際交流の現実》
 3     |_____|_____.      積極性  0
12     |___________|__.      帰国子女  ー
14     |_____.          |  会話能力    ＋
15     |_____|________|_____.    パーティー  ＋
20  C1 |_____.                 |  世界に人脈を作る    ＋
21     |_____|______________|_____.     グローバル  ＋
 4     |_____.                        |  Facebook  ＋
 5     |_____|                        |   英語  ＋
 6     |_____|__________.            |     アメリカ文化  0
 7____ |_______________|___________|__________.  アメリカ軍の基地  0   ____________________
13     |_____.                                 | 異国での一人暮らし  ー      《C2:留学生支援の背景》
17  C2 |_____|__________________.               |   チューター  ＋
18____ |_________________________|_____________|________. 奨学金  ＋   ____________________
 1     |___________.              価値観・考え方の違い  ＋    |                 《C3:違いを受け入れることの大切さ》
 9     |___________|_____.                                |  文化  ＋
19  C3 |_________________|.                                |  旅行  ＋
10     |___________.       |                               |   人種  ＋
11____ |___________|_______|_______________.              | 宗教  0   ____________________
 8     |___________.                      |               | 白人至上主義 ー    《C4:残された課題》
16  C4 |___________|_______.               |               | 踊る場所のクラブ  ＋
22     |_________________|_______________|_____________|  黒髪  ＋   ____________________

       +----+----+----+----+----+----+----+----+----+----+
```

左橋の数字は重要順位。c1、c2、c3、c4は各クラスターの範囲を示す。各項目の後ろの符号は単独でのイメージ

図４　JB 第１回調査のテンドログラム

```
       0                                                 10.26
       |----+----+----+----+----+----+----+----+----+----+  距離  ____________________
 1     |____.  面白い ＋                                          《C1:交流して初めて気づいた大切なこと》
 4     |____|_____.    考え方の幅、見方が広がる  ＋
 2  C1 |____.      |    異文化    ＋
 3     |____|_____|___________.    文化的な違い（服装や食べ物等）宗教的な違い 0
14     |_________.            |          写真  ＋
15     |_________|__.          |              facebook  ＋
16____ |___________|_________|_______________. インターネット  ＋ ____________________
 6     |____.                                |  欧米への憧れ  0     《C2:スムーズな国際交流を阻むもの》
 7     |____|________.                       | 英語  ＋
 8     |_____________|____.                   |  中国・韓国 0
 5  C2 |_________________|________.           | 個人主義  0
 9     |_____________.            |           |   ステレオタイプ ー
13     |_____________|___________|_____.     | 先進国・発展途上国、お金の問題  ー
10     |____.                          |      |  心の安らぎが大切、家族や恋人と離れて暮らしている＋
11____ |____|_____________________|_____|________. 疎外感  ー   ____________________
12     |____.              ネイティブとノンネイティブ  0    |        《C3:日本語の難しさ》
18  C3 |____|________.      「に，で」等言葉を繋げる文字の使用が難しい  0
17     |_____________|_____________________________|  日本語の文字数（特に漢字）が多い0

       +----+----+----+----+----+----+----+----+----+----+
```

左橋の数字は重要順位。c1、c2、c3は各クラスターの範囲を示す。各項目の後ろの符号は単独でのイメージ

最後の項目の「アメリカ軍の基地」は、かつてアメリカに留学した親族の経験談と、アメリカ軍基地に縁を持つ何人かの留学生の存在が結びついて連想されたものであると言う。JBの国際交流、英語、アメリカ文化への関心の背景として身近に接する親族の留学経験があることが示唆される。

クラスター２ ＜留学生支援の背景＞：

「異国での一人暮らし」〜「奨学金」

このクラスターは、留学生へのサポートと結びついている。まず「異国での一人暮らし」は、家族や友人と遠く離れ一人日本へやってきた留学生の孤独や寂しさを思いやる気持ちがサポートの背景にあることを示している。また、よき「チューター」に恵まれる留学生がいる一方で、そうでない留学生もいることから、JBは後者の力になりたいという思いを持つ。「奨学金」は、国費留学生に直接結びついている。「よくも悪くも強い意志を持っている」留学生として、JBがなんらかの強いインパクトを受けていることが窺われる。ここにはJBの留学生そのものへの関心と留学生支援への志向が具体的に表れていると言える。

３項目のうち、異国での一人暮らしがゼロで、他の２項目はプラスのイメージとなっている。

クラスター３ ＜違いを受け入れることの大切さ＞：

「価値観・考え方の違い」〜「宗教」

交流を通じて「価値観・考え方の違い」「文化の違い」「旅行に対する認識の違い」「人種の違い」「宗教の違い」を体験する中でJBが感じたのは「違いを受け入れることの大切さ」である。このクラスターの１項目「価値観・考え方の違い（を受け入れる）」は、重要順位が第１位の項目で、JBが日本人にだけでなく留学生に対しても求めるものである。JB自身は、違いを違いとして受け入れるとともに、それを自分の考え方と照らし、自分なりの価値観や考え方を確認する作業を重ねている。JBは根底にある価値観や考え方を変えることには慎重であるように見える。例えば、久しぶりにあったときや別れのときに行われることのあるハグ（抱きしめ）は、「合わせてやるけれど，なかなか慣れない」としている。また、授業で、手をあげないで発言する留学生のスタイルは、日本人としてはまねできないと

している。考え方や文化の違いに気づかず留学生との恋愛で傷つく日本人に対しても幾分覚めた目で見ている。

５項目中４項目がプラスのイメージである。パーティでは「宗教」を意識して食べ物に気を遣うが、イメージはゼロである。違いに対して「冷静」であろうとするJBの態度を示すクラスターであると言えよう

クラスター４　＜留学生との交流に残された課題＞：
「白人至上主義」〜「黒髪」

ここでは、留学生との交流においてJBがまだ整理ができない課題が示されている。「白人至上主義」について，JBは、日本人だけでなく、留学生の間でもこの傾向があることを感じている。「あまり公には聞かないがパーティを見ているとけっこうはっきりあると感じる」と言う。一部の留学生が好んで行く盛り場のクラブに対しても、同じような状況が見られる場所として否定的なイメージを持っている。しかし、このように感じるJB自身にも欧米に対する憧れやコンプレックスが存在し、それを全面的には払拭できないことを認めている。一方、留学生の中には、黄色い髪を黒く染めるなど、日本人らしさに関心を示す者も少なくない。彼らにとっては、英語が上手であったりすることよりも、日本語を話し、黒い髪を持つ日本人のあるがままの姿に価値があることになる。JBはこうした留学生に接して、むしろ日本人であることを誇りに思うことが大切で、そのことにもっと日本人は気がつくべきではないかという考えを持ち始めている。

3項目中マイナスイメージは「白人至上主義」の１項目である。クラブに対するJBのイメージは必ずしもよくないがプラスとなっているのは、自身が述べているが、留学生にとってはストレス発散の場所として機能していることを理解しているためであろう。

全体

全22の項目のうち，プラスのイメージは14、マイナスのイメージは２、ゼロは６、で、全体としてはプラスが多いが、ゼロの項目も少なくない。迷いを持ちながら交流活動に携わっている側面があることが推測される。

項目の背後、各クラスターの背後に、うれしかったこと、泣いたこと、様々な具体的な体験が思い浮かぶとJBは述べているが、過去の体験に基づ

くJBの理解や姿勢がここに現れていると言える。まず、全体を通じて、JBが留学生の状況、留学生の言動をよく観察し、留学生のニーズを考えながら、交流に関わってきたことが見えてくる。日本人学生の立場からだけでなく、留学生の立場からも物事を見ようとする視点を持つ。クラスターの一番上にある項目「自分の意志をはっきり言う」は、双方にとって大切なことだと考えており、JBの留学生の側にも立った「支援的な志向」が見出せる。

また、クラスター３で触れたように、留学生に関わる事象を、自分の価値基準と対照して捉えている点が特徴的である。異なる価値観や文化の相違などに触れたとき、新しいやりかたを取り入れてみるというより、それらを知ることで自分の価値観やアイデンティティといったものを見つめ直し、確立していこうとしているように見える。留学生を知ること、留学生と価値観を交換できるような交流そのものに意味を見出していると思われる。留学生との交流は、JBにとって、外への関心を広げるというよりも「自己理解を深める」ことや「自己確立」への後押しとなっていると推測される。

３．２．２　JBの前回の調査結果と今回の調査結果の比較

3.2.2.1　JBの前回の調査結果の概要

前回調査、交流初期のデンドログラムは図３のように、３つのクラスターから構成されていた。
連想項目18のうち、プラスが７、マイナスが４、ゼロが７で、全体としてはプラスが多い。各スラスターの解釈の概略は以下のとおりである。

クラスター１　＜交流して始めて気づいた大切なこと、注目していること、感じていること＞：「面白い」～「インターネット」

JBがその時点で心から「面白いと実感する」国際交流に関わる関心事が示されており、このクラスターは**「交流への意欲や原動力」**を表す動機付けのクラスターとして解釈できる。「違い」は互いを知る手がかりであり、楽しく交流を深め、関係を構築するための有効なツールとして捉えられていた。

クラスター２ ＜スムーズな国際交流を阻むもの（注３）＞：
「欧米への憧れ」～「疎外感」

国際交流に対するステレオタイプ的なイメージ、実際の交流とのギャップ，留学生の背後にある問題が示され、国際交流に伴う**「解決していくべき課題」**のクラスターとして見ることができた。

クラスター３ ＜日本語の難しさ＞：
「ネイティブとノンネイティブ」～「日本語の文字数が多い」

留学生との交流をきっかけに、留学生の立場から見た日本語の難しさや、どのような日本語表現を留学生が使用したがっているかについて、JBが理解し始めたことが示されていた。

3.2.2.2 JBの前回調査との比較

全体のおおまかなクラスターの構造は、前回と似ており、国際交流についての、JBの**「当事者としての関心事」**と、それとは少し距離を置く**「客観的な把握事項」**とからなる。刺激文から連想された項目は約半数は前回と同じ内容だが、残りの半数は新しい項目である。重要順位の上位の項目にも変化が見られる。

前回と今回の調査で出て来た主なトピックについての**JB**の調査時点での認識や態度を本人のクラスター解釈をもとに、以下の**表２**にまとめた。またグループに入り活動する以前について言及があるときは、それを記した。

表2

JB	活動前	前回調査時期　活動開始から６ヶ月	今回調査時期　　活動開始から２年
日本と世界の違い全般		違いは交流を深めるための恰好のトピック 違いが面白い	価値観や考え方の違いを受け入れることが大切／相手の習慣に合わせることはできても違和感は残る、また、譲れないものもある
宗教の違い			パーティのときの食べ物を配慮する
留学生の立場への理解		留学生が心の安らぎを保つための手助けがしたい	異国での一人暮らしの寂しさを軽減したい

留学生へのサポート		留学生の視点、 フィードバック大切 気がつかないことがまだまだある	留学生の視点が大切 留学生にとって、困難な状況があれば、発信して周りに知らせることが大切 チューターに恵まれない人を助けたい
交流にとって大切なこと			自分の意志をはっきり伝えること 積極性 価値観や考え方の違いを受け入れること
留学生との交流		すべて面白い 新しい人と出会い親しくなりたい 自分も相手も世界を広げることになる	会話と交流を大切にしたい 価値観を交換し合えるような大切な友人との関係を将来も大切にしたい 優しくすることでなく交流することに意味がある
意見表明力	意見をはっきり言う	言語力不足で意見を言えないのは悲しいこと。疎外感与えない配慮が必要	自分の意思をはっきり伝えることは日本人にも留学生にも大切なこと、しかし、同時に場面に応じた調整も必要
国際交流全般	国際交流の共通語は英語／相手は欧米人	交流の相手は、欧米人だけではなく、アジア留学生も多いことを発見 共通語は必ずしも英語というわけではなく、むしろ日本語 ステレオタイプ的な見方はよくない 国民性より個人を見なければいけない	英語はやっぱり大切 帰国子女への反発 国民性より個人を見なければいけない
欧米人、欧米文化	憧れる	欧米への単純な憧れはなくなるが、欧米人へ甘く、アジア人に厳しい傾向（アジア人には日本に合わせることを求める）を自分自身も完全に払拭できない	白人至上主義は留学生達の中にもある 日本人としてのアイデンティティ、日本人としての誇りを持つことが大切／日本に関心がある留学生には日本人であることのままで価値がある

前回と今回の調査結果の比較からあきらかになったJBの主な変化は以下のとおりである。

① 留学生との交流すべてが面白いという認識から、いい面も悪い面もあるという認識に変わる。

② 「違い」は楽しむものから、「受け入れるべきもの」に変化し、価値観や考え方の違いを受け入れることは、交流において最も大切なことと認識されるようになる。

③ 新しい留学生の友人を次々作りたいという気持ちより、大切な友人との関係を将来も維持していくことに関心が向けられている。

④ 相対的に留学生支援への関心が高くなる。

⑤ 国際交流に関するステレオタイプ的な見方と現実とのギャップは、一部を除き特に関心が払われなくなる。

⑥ 日本語の難しさについては、項目に上らず、特に関心が払われなくなる。

また前回と今回の調査で継続して見られる事柄は次の点である。

① 留学生の立場にたった視点

② 英語の重要性に対する認識と英語能力に対する偏った評価に対する反発

③ 意見を発信することが重要であるという考え

④ 国民性より個人を見なければいけないという考え

⑤ 欧米への憧れやコンプレックスを全面的に拭えない点

２つの調査の比較で最も目を引くのは、前回重要順位の一番上にあり、本人のクラスター解釈でも何度も出て来た「面白い」という言葉が今回の調査では項目にも本人の解釈にも出てこなかったことである。交流初期の前回の調査においては、交流の動機付けとしてクラスター１をくっきり捉えることができ、それは文化変容カーブのハネムーン期（注４）を連想させるものであったが、ハネムーン期に終わりがあるように、JBにおいてもこの時期が過去のものとなっていることが窺える。「面白い」の変わりに、今回、重要順位の上位にあるのは、交流の心得的な項目である。国際交流に対する姿勢が少し冷めたものになっていることが感じられる。

４．総合的考察

２回の調査を比較したことで、JA、JBの変化が明らかになると同時に、JA、JBの留学生との交流に対する態度構造の個々の特徴がより鮮明になったように思われる。以下では両者の特徴が表れているいくつかの点をとりあげ、考察していく。

４．１　交流に対する動機付けと課題について

前回の調査では、JA、JB２名に共通して交流に対する「動機付けのクラスター」と「課題のクラスター」が形成されていた。JA、JBそれぞれの動機付けと課題の変化について考えたい。

JAの動機付けについては、その核であった「心の広がりの実感」が今回もそのまま維持されている。同義の「オープンマインド」は今回重要順位が第１位の連想項目で、JAがその重要性を再認識していることがわかる。これを核として展開する「視野の広がりや理解の広がり」また、「世界への関心の広がり、交流の楽しさ」がそれぞれクラスターを形成しており、交流への動機付けは一層高まっていると言える。

一方、JBでは、前回では動機付けの核ともなっていた「面白さ」についての言及が今回は全く見られなかった。JBの関心事を示すクラスターには、「国際交流で大切な事柄」が列挙されているが、これは動機付けとしては弱く見える。「面白さ」がなくなってしまったのは、なぜだろうか。交流初期の興奮が冷めたということもそのひとつの理由であろう。また、JBは留学生支援への志向を根底に持つためか、日本での留学生の生活への関心は高いが、留学生の母国での生活や文化等への関心はさほど示していない。この1年半の間に、JAが海外へ何回か出かけていったのに対し、JBにはそうした行動は特に見られない。新しい刺激が特には得られず、それゆえ面白さが次々に展開せず、収束に向かったようにも思われる。さらに、JBは今回調査までの期間、グループの活動の中心メンバーのひとりとして活発に活動していたことから、交流のいい面も、大変な面も十分体験し、客観的で現実的な見方をするようになり、その結果面白いという単純な気持ちを持てなくなった可能性がある。今回、留学生支援と結びつくクラスターが形成されていたが、JBにとっては、むしろこのクラスターの方が交流継続

の動機付けとなっていると言えるかもしれない。JBは全体としても交流に対して当事者意識が薄れ少し距離をおいて観察者として交流を見ているように見える。

これに対してJAの動機付けが１年半後も同じように維持されているのは、JAの動機付けが「面白い、楽しい」といった一時の感情ではなく、大変さはあってもJA自身が変化し成長していく実感をともない、しかも「人前で意見を言えるようになる」といった具体的な成果にも結びつくものであったためではないだろうか。前回の調査ではJAにおいては「楽しい」「面白い」という言葉はなく、今回の調査で初めて楽しいと言葉が出てきている点も興味深い。

「課題」に関しては、次のような変化が見られた。JAは様々な留学生との日常的な交流の中で互いに違いがありながらも同じ大学生活をともに送る関係を持てることから、「違うことが当たり前」という認識を持つようになり、それにより課題であった「違いを乗り越えること」をむしろ違いを知る楽しみに変えたように見える。JBでは、「国際交流に対するステレオタイプ的なイメージや誤解などを取り除くこと」を課題としていたが、その大部分は今回は連想項目として現れず、本人の課題としては既に解決されているか重要なものではなくなっていることが示唆される。しかし、「白人至上主義」については、身近な国際交流の中にも根強くあることを感じ、またJB自身、欧米への憧れやコンプレックスが払拭しきれていないことを感じ、これが課題として残されている。

以上で見たように、交流初期に両者に共通して見られた動機付けのクラスターと課題のクラスターは１年半後においては、それぞれに変化が生じ、今回の調査では、前回のようにはっきりとクラスターを性格づけることができなかった。動機付けのクラスターと課題のクラスターがはっきり見られるのは、交流初期に特徴的なものかどうかは２名の調査からは判断することはできないが、ひとつのタイプを示すものであることは示唆される。

４．２「違い」についての認識

違いをどう捉えるかは異文化接触研究の中でも適応のレベルや、文化的感受性を評価する鍵となるものである。既に見て来たように、JAは交流初

期には「違い」に対しマイナスのイメージや恐れを感じていたが、１年半後の今回は、「違っていることが当たり前」という認識を持つようになる。JBでは、交流初期には、違いは大きな興味を持って受け止められ交流の原動力ともなっていたが、１年半後には、国際交流では「価値観や考え方の違いを受け入れることが大切」という認識へと変化していた。交流初期の認識には差があるが、今回示された認識は「違いを受容する」という点で共通している。ベネットの異文化間感受性の発達的モデル（注５）による６段階の発達レベル「否定」「防御」「最小化」「受容」「順応」「統合」の中では、JA、JBは文化的相違性の必然性を認める４段階目にあたり、発達の一過程にあると言える。

しかし、違いに対するJA、JBの態度には異なる点もある。JAは、様々な人と接することで、「いいこと　悪いこと　何でも吸収し成長の糧にしたい」と考えている。したがって、これまでの考え方や価値観に固執せず、あまり躊躇することなく「違い」を受け入れることができる。このことは考え方に留まらず「行動」にも及ぶ。思っていても口にしないことは伝わらないことがわかると、心のうちをすべて言葉にして表現するという訓練を自らに課し、日本のスタイルとは異なる方法を身につけようとしたのは、その例である言えよう。この段階はベネットの発達モデルでは「順応」の段階にもあたる。

一方JBは、先にも触れているが、留学生が授業で手を挙げず勝手に意見を述べることについて、文化の違いとして認めながらも、「日本人としてはまねできない」とし、また挨拶としてのハグ（抱きしめ）は、「相手に合わせてやるが慣れない」とするなど、「行動」には抵抗感があることを述べている。JBは、日頃から留学生の立場に立ち物事を見ようとする姿勢を持ち、異なる考え方や異なる行動への理解が深いと考えられる。しかし、JBにとって、留学生は、JAのように自分を変えて成長させてくれるものというよりも、自分を見つめ直し確立していくための他者としての存在のように見える。それは，交流当初、すべてが面白かったときにも、根底に持っていた態度であると思われるが、JBは価値観や考え方の違いに対しては、より慎重に検証の上受け入れようとする傾向が強いと言える。「価値観や考え方の違いを受け入れること」は国際交流をする上で最も重要なことがらとしてJBに認識されているのは、ともすれば異なるものを排除して

しまう可能性を理解すればこそ、自分の問題としても、また、一般論としても、その重要性をより強く認識するためであるとも考えられる。

留学生との関わりにおいて、JAは自己変革、自己成長を志向し、JBは、支援と、自己確立を志向しているように思われる。こうしたJA、JBの志向の違いが、「違いに対する態度」にも反映されていると言えよう。

５．おわりに

JA、JBに対して２回の調査をおこなったことで、変化を追うだけなく、２名の枠組みの異なり、個々の態度構造の特徴がよりはっきりしてきたと言える。PAC分析では本人の自由連想によって提示された項目に基づいて分析が進むため、２名の学生にとっての留学生との交流は、個別の枠組みで捉えられたものになる。今回の調査では、JAが当事者として、自身へ影響を及ぼし、自身を変化させ成長させるものとして交流を見ているのに対して、JBは観察者として、留学生を支援する視点から、また自分の考え方や価値観を検証するものとして交流を見ているという違いがより明確に現れていたように思う。前回の調査では、JBにおいてJAにはあまり言及されない留学生に対する支援的な視点が見られるのは、JBの方が交流活動に携わってきた期間が長く、関わる時間の長さの違いが影響すると推測したが、両者の違いは、関わる時間の差ではなく、関わる立場、あるいは、むしろ、両者が持つそれぞれの関心や志向が反映されていると解釈できることが今回の調査から見えてきたと言える。そしてこうした志向は、１年半程の時間を経て、JAでは大きく変化しておらず、JBでは、その志向が明確になっていたことがわかった。この先、２名の志向が変わっていく可能性もある。２名というごく限られた人数を対象とした分析であるため、今回の事例により類型を見出すことは難しい。しかし、留学生との交流が日本人学生に与える影響を見るとき、個々の学生の持つ志向が、変化の要因としても作用することを本稿で示唆することができたのではないかと思う。留学生との交流に関わろうとする日本人学生が志向するものは様々あると考えられる。海外に興味を持つ学生がその窓口として留学生との交流を望むケースもある。短期留学から戻った日本人学生が同じ立場にあった者として留学生に関わるケースもある。今後は分析事例を増やし、変化の過程や要因を

さらに探っていきたい。

注

1. 調査時に基礎データとして年齢、所属、学年、国際交流グループへ参加の時期と参加のきっかけ、グループ活動以外の留学生との交流活動（チューター等）、海外滞在経験について尋ねた。
2. 内藤（2002）のPAC分析の手順従い、以下のように行った。①連想刺激の提示（文面と口頭による）②当該テーマに関する自由連想（被調査者がカードに記入）③連想項目の重要順位への並び替え④連想項目間の類似度評定⑤類似度距離行列によるクラスター分析（テンドログラムの作成）⑥被調査者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告⑦各連想項目のイメージ（プラス、ゼロ、マイナス）の聴取。なお、クラスター分析には統計ソフト「HALWIN　version 6.24」を用い、ウォード法により行った。
3. 藤井（2010）では、このクラスターのタイトルはJBによる＜交際交流する前に抱いたイメージ（多分一般の人も考えているだろうと推測されるイメージ）＞をつけているが、課題のクラスターであることがわかるよう本稿では＜スムーズな国際交流を阻むもの＞に変更した。
4. 文化変容カーブについては、横田・白土（2004）、ホフステード（2007）に紹介がある。
5. ベネットの異文化間感受性の発達的モデルについては、高井（2006）に紹介がある。

参考文献

瀬口郁子・田中圭子（1999）「チューター制度の運用に関する提言—満足度と教育的効果の観点からの一考察」『神戸大学留学生センター紀要』６号 1-17

高井次郎（2006）「異文化接触に伴う心理」『講座・日本語教育学第５巻多文化間の教育と近接領域』82−94

田中共子（1995a）「日本人チューター学生の異文化接触体験：ソーシャル・サポートとソーシャル・スキルおよび自己成長を中心に」『広島大学留学生センター紀要』６号 85-101
田中共子（1996）「日本人チューター学生の異文化接触体験（２）：その役割と異文化交流に関する質問紙調査」『広島大学留学生センター紀要』７号 84-108
坪井健（1999）「留学生と日本人学生の交流教育—オーストラリアとの比較を通して—」『異文化間教育』13号 60−74
内藤哲雄（2002）『PAC分析実施法入門［改訂版］』ナカニシヤ出版
花見慎子（2006）『大学生と国際交流—四人のライフ・ストーリー』ナカニシヤ出版
藤井桂子（2010）「留学生との交流が日本人学生に与える影響−交流グループに所属する日本人学生の事例分析−」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』17号 135-160
ホフステード（2007）岩井紀子・岩井八郎訳『多文化世界』有斐閣
山崎けい子（2002）「チューター活動における日本人学生の意識変化」『富山大学人文学部紀要』36号 101-114
横田雅広・白土悟（2004）『留学生アドバイジング』ナカニシヤ出版